

第四回 北のシナリオ大賞

テーマ「ほら、となりにいるよ」

Long distance call

— 僕の想い、彼女の願い —

最終決定校

(瀬川隆文)

漣(M)「秀君、覚えてる？シューパロ湖の水面を揺らしながら吹いて来た春風が鉄橋を叩く音。どこまでも広い夏の空に湧きあがった入道雲。小学校のグラウンドに立っていたイタヤカヤデの大きな葉が黄金色に染まった秋の夕日。早朝、真っ白な雪原に残された野兎の足跡。私はそんな鹿島を覚えているよ……」

○タイトル・コール

秀一・漣「Long Distance Call」

秀一「……僕の想い」
漣「……彼女の願い」

○2006年 東京 秀一の会社

電話の音やキーボードを叩く音が聞こえる。

それらの音に混ざって、TVから夕張の財政破綻を伝える声。

同僚「課長、ようは倒産みたいなものですよね」
上司「街もつぶれちゃうか……。そういう

えば、秀一……」

秀一「ええ。小学生の頃まで……」
上司「まだ知り合い、いるのか？」

秀一「……幼馴染が」

○東京・新宿駅前の信号

雑踏の中に響く信号の変わる音楽。

一斉に行き交う大人数の靴音が響く。
秀一(M)「夕張。その街の名前を聞くと、いつも心に針で刺されたような微かな痛みを覚える。炭鉱で栄えた観光の街。僕と幼馴染の漣は、その鹿島で生まれ育ち、何時でも何処でも一緒だった……」
靴音が消え、代わりに虫や鼻の鳴き声が聞こえてくる。

○1996年 夕張 夏

秀一の家の庭先。

母「漣ちゃん、秀一、本当にそのテントで寝るの？」

秀一「庭ならいいでしょ？」

母「母さん、心配だわ……」

漣「大丈夫です！」

母「(笑いながら)そお？んー。漣ちゃん

が一緒なら安心かな？」

秀一「(不貞腐れて)僕だけならダメなくせに！」

秀一の言葉に、母、鼻で笑いながら。

母「日頃の行いが物を言うのよ」

秀一「フン！」

母「それじゃ、漣ちゃん、よろしくね。(口

煩く)秀一、早く寝るのよ！」

母、そう言いながらベランダから家に入る。

網戸の閉まる音が聞こえ、風鈴の鳴る音。

秀一「べーだ！」

漣がクスクス笑う声に混ざり、虫の音が

聞こえる。

漣「鹿島での最後の夜だね」

秀一「でも夕張、離れるわけじゃないよ」

漣「そうだね」

野鳩の鳴く声が聞こえる。

漣「夜なのに鳴いてる」

秀一「漣……」

漣「なに？」

秀一「これ……」

秀一、そう言いながらバード・コールを鳴らす。

漣「鳥の鳴き声みたい」

秀一「バード・コール。鳴らすと鳥が寄ってくるんだよ。御揃いで買ったんだ。……あげる」

漣「……いいの？」

秀一と漣、互いにバード・コールを鳴らす。音に違いがある。

秀一「音、聞こえたら、何処に居るか分かるから」

漣「ありがとう！大事にするね！」

虫や鼻、野鳩の鳴き声が静かに消え、都会の雑踏と大人数の靴の音が蘇る。

秀一(M)「あの頃、僕たちはいつまでも傍にいと信じていた。夕張で過ごした最後の冬までは……」

信号機が変わる音楽。

○1996年 夕張 冬

秀一「東京！」

父 「秀一が春に卒業したら引越す」

秀一 「(怒って) 父さん！」

父 「この町はシューパロダムの底に沈むから、来年にはみんな引越さなきゃならないんだ」

秀一 「でも濡の家と同じ、清水沢に移るって言ったじゃないか！」

父 「最初はな・・・」

秀一 「(不貞腐れながら) なんで、・・・東京？」

台所にいた母親が近づいてくる。声、次第に大きく。

母 「東京のお爺ちゃん、病気なのよ。お婆ちゃん、付きっ切りでね。叔母さん達は遠くに住んでるでしょ？お父さんたち、お手伝いしてあげたいの」

秀一 「一番遠いのは、うちじゃないか！」

父 「それに、いまが不景気なのは秀一も分かるだろ？」

秀一 「・・・うん」

父 「父さんの会社も、いま辞めると、少し多くお金をくれる。それに友達が東京で仕事を手伝って欲しいって言ってくれてるんだ」

秀一 「(口籠りながら) 急に言われたって・・・」

父 「分かってくれな。秀一」

○小学校 放課後の教室

チャイムの音と下校を促す放送が響く。

遠ざかる子供達の声。

濡 「東京！」

秀一 「・・・うん」

濡 「なんで！秀君だけ残れないの？」

秀一 「何処に住むのさ？」

濡 「うちにおいでよ！」

秀一 「濡の家だって引越すのマンションだろ？僕の部屋なんか無いよ」

濡 「私と一緒にいいでしょ？」

秀一 「(照れながら) ば、ばか！無理だって。うちの親が許してくれない」

濡 「じゃ、どうするの！本当に行っちゃうの！」

秀一 「・・・仕方ないだろ？」

濡 「(泣きながら) 秀君のバカ！」

秀一 (M) 「当時の僕に濡の気持ちを受け止める余裕は無く、仲直り出来ないまま、翌年の春、僕は夕張を後にした」

○1997年・5月 東京・月島 秀一のマンション

晴海から都心に向かって走る大型トラックの音に混ざり、小型のディーゼル船が隅田川から海に向かう音が聞こえる。

電話が鳴る音。

母 「秀一、電話出て！ 母さん、お爺ちゃん、お風呂に入れてるから！」

秀一 「うん。はい、平山です」

濡 「秀君？」

秀一 「・・・濡？」

濡 「うん」

秀一 「東京の番号、良く分かったね？」

濡 『おじさんから引越しの葉書きてたから・・・。突然、ごめん』

秀一 「ううん。僕も手紙書こうと思ってた。・・・謝りたくて」

濡 『謝ることない』

秀一 「でも、濡、泣かせちゃったし」

濡 『悪いの私だから。ゴメン』

秀一 「僕もゴメン」

濡 『・・・東京・・・どう？』

秀一 「2ヶ月経つけど、街がよく分からない。月島って所に住んで、海が近い」

濡 『海か。夕張からは遠いからね』

秀一 「でも山が遠い。人も車も多いし」

濡 『そうなんだ。・・・そっちの中学、・・・慣れた？』

秀一 「(言葉濁しながら) ・・・なんとなくね。濡は？」

濡 『クラスに鹿島小の子、いるから・・・』

秀一 「へえー。でも元気そうで良かった」

濡 『・・・元気・・・じゃないよ』

秀一 「何かあった？」

濡 『秀君がいないもん！(淋しそうに) 学校の行き帰り、教室にも、何処にも・・・。傍に秀君がいないのに、元気なわけないよ・・・』

秀一 「ごめん・・・」

濡 『・・・謝らないで』

秀一 「・・・でも、やっぱりゴメン」

電話の向こう微かなラジオの音。音楽が

聞こえる。

溍 『……あのね。たまに電話していい?』

秀一 「僕も」

溍 『ううん。私からする。秀君から来ると

思ったら、私、電話の前から離れられなくなる。だから私がする……』

秀一 (M) 「こうして、僕と溍の長距離電話が始まった……」

○電話の音

溍 『それでね。その因数分解が分かんなくて。ほんとうよ?って感じ?』

秀一 「因数分解はさ。式の両側から見るといいよ。……すると、Xたす3の2乗。ね」

溍 『おおおお!さすが秀君!算数、得意だったもんね』

秀一 「溍は分数の計算でも散々悩んでたよね」

溍 『あれって余計に難しくしてるだけだよ!』

秀一 「まあね。ん?花火?」

受話器の向こうから、微かに聞こえる花火の音。

溍 『マンションの下でやってる』

秀一 「窓、開けてるんだ」

溍 『……開けてないの?』

秀一 「車の音うるさいし。それにクーラーつけてるから」

溍 『うそ!』

秀一 「こつちじや普通。無かったら、夏、暮

らせない」

溍 『そんな暑いんだ』

秀一 「夜は暑くて寝れない。朝は汗でグツシヨリ」

溍 『大変だね』

秀一 「でも慣れなくちゃ」

溍 『……慣れちゃうんだ』

花火の音がはつきりと聞こえる。

溍 『(気を取り直して)あのね。今度十月に鹿島の人たちが集まるの。夕張を離れた人も来るって』

秀一 「溍も行くの?」

溍 『札幌に越した綾ちゃんが来るから……秀君、……来れないよね?』

秀一 「……ちよつと無理。さすがに遠い」

溍 『そうだよね……。ねえ、秀君。(バード・コールの音) 持つてる?』

秀一 「(答えるようにバードコールを鳴らす)いつも首から下げてるよ」

溍 『私もだよ』

○営団地下鉄・日比谷線 車内

満員状態の車内、押しつぶされ、モミクチャにされている秀一。

秀一 「(くぐもり、疲れた声でありながら、少し怒りつつ)何だって、こんなに人が多いんだよ!この街は!」

駅に滑り込む地下鉄。断続的に続くブレーキ音。

内の人々の靴音。

秀一 「ちよ、ちよつと!誰かに引っ掛かっている!バード・コール!引つ掛かっている!」

ペンダントの鎖が切れる音、それに続き、断末魔の悲鳴のように短く鳴るバード・コール。

床に転がる音。

秀一 「僕の!……バード・コール!」

無情に響く大人数の靴音。次第に小さくなり、

溍 『……満員電車じゃ見つからなくても仕方がないよ』

秀一 「……ごめん」

溍 『仕方がないよ……』

秀一 (M) 「溍の囁くような声に、僕はとても大切な絆を失った気がした……」

音楽の間

○電話の音。

溍 『高校、受かりました!』

秀一 「おめでとう」

溍 『いやいや。お互い様と言う事で』

秀一 「僕は推薦だから」

溍 『それでそっちの付属高校は入れるなんて凄いいよ。それも理系でしょ?』

秀一 「(照れながら)いや。まあね」

溍 『うわっ!(おどけて)調子乗ってます?』

秀一 「べ、べつに!」

溍 『嘘。ジョーダン。やっぱり秀君は凄

よ。将来はコンピュータ関係？あれ？小三の作文でロボット作りたいとか書いてたっけ？」

秀一「冗談だよ」

漣『でも夢なんだよね？だから高校、工学科でしょ』

秀一「まあ、できればね。ところで漣は将来どうするの？」

漣『福祉とかに進みたいかな。保育士とか介護士？看護師はちよつと無理っばい』

秀一「なんで？」

漣『私、血とかダメな人だから』

秀一「そんな？でもなんで？お母さんの影響？」

漣『それもかな。でも本当のところ、夕張、お年寄り多いからね』

秀一「・・・地元残るの？札幌とか、こっちには？」

漣『それはないと思う』

秀一「どうして？出て来た方が・・・」

漣『嬉しいよね。でも私は夕張がいい。此処の自然が好き。人の結びつきの強さが好き。きつとそんな場所、他に無いから。理由はそんな事なただけど。でもそれが一番大事かなって、そう思う・・・』

○携帯の着信音。

秀一「もしもし？」

漣『どーもー！漣ですー！』

秀一「携帯、買ったの？」

漣『そうですー！』

秀一「知らない番号だからドキツとしたよ。ついに携帯デビューですか？」

漣『女子高生の必需品でしょ？』

秀一「たしかにね。そうだ。メル・アド教えてよ」

漣『・・・やだ』

秀一「へ？アドレスないとか？」

漣『ある』

秀一「じゃ、教えてよ」

漣『教えない』

秀一「えーと。もしもーし。わけわかんないんですけど？」

漣『教えたらメールするでしょ？』

秀一「するよ」

漣『私、返さないよ。電話する』

秀一「でもメールの方が速いし、電話代もかからないし。相手の用事、気にしなくていいし・・・」

漣『だ・か・ら、い・や・だ！』

秀一「えーと・・・」

漣『秀君とは電話がいい。ほかの人はメールでもいいけど、秀君は電話じゃなきゃダメなの。いま外かな？勉強中かな？もう寝ちゃったかな？そんな事を考えながら電話したいの。秀君の声が聞きたいの！だめ？迷惑？』

秀一「いや、全然・・・」

漣『それならいままでどおりね』

秀一(M)「僕と漣、互いに相手の事をどう

想っているかは、充分すぎるほど分かっていた。だから敢えてそれは口に出さない。もし言葉にすれば、余計に互いの距離を悲しく感じてしまう。だから漣がメールを嫌ったのは正解だった。きつと想いを書いてしまったはずだ。時にメールは人の想いを虚ろにする。僕はそう思う」

○携帯の呼び出し音が二、三度鳴り、電話のつながる音。

秀一「ねえ、修学旅行、どこ？」

漣『お約束の奈良・京都』

秀一「うちも同じ。日程は？」

漣『十三日のお昼に京都に着いて一泊で、次の日の昼から奈良』

秀一「半日うちの方が早いな。朝には京都出るから」

漣『残念、会えるかなとか思ったけど』

秀一「そうだね。そうだ！先に感想聞かせてあげるよ」

漣『それ禁止！面白くなくなる！』

秀一(M)「僕達は互いに家に帰り着いてから、改めて旅の話をする事に決めた。まるで一緒に過ごしたかの様に感じる為に・・・」

○京都・修学旅行のバスの中。
ざわつく生徒達の声。

八嶋「なあ、西尾。やっぱ京都、寺ばっかだな」

西尾「んな事より、渋滞ひどくねえ？」

秀一(M)「修学旅行と秋の観光シーズンが重なったせいかな、朝から奈良へ向かった僕たちのバスは昼近くまで京都市内の渋滞に捕まっていた」

八嶋「あれ？反対車線のも修学旅行のバスじゃん」

西尾「マジ？可愛い娘、乗ってる？」

八嶋「うーん。おっ。けっこういい感じの娘。あれ？こっち見て驚いてる？」

西尾「八嶋……、変な事した？」

八嶋「ばか！しねえよ！おっ？携帯かけてる」

西尾「やっぱ、なんかしたんだよ。警察呼ばれんぞ」

八嶋「ふざける！」

西尾「いや！絶対だって！なあ、秀一！」

秀一「(気の無い感じで)ん？ああ。たぶんな……」

携帯の着信音が鳴る。

秀一「……濡？(一呼吸おいて)もしもし？」

濡『(慌てて)秀君！秀君！』

秀一「何かあった！」

濡『(涙声で)外！外、見て！』

少し遠くに聞こえる八嶋と西尾の会話。

八嶋「あれ？あの娘、なんかこっち、手、振ってねえ？」

西尾「って言うか、秀一、あの娘と電話してない？」

秀一「……濡？」

濡『「会えたね。秀君、会えたね！」』

秀一(M)「だけどそれは、僅かな時間で、僕達に乗せたバスはゆっくりとすれ違い、離れて行つた。東京と夕張なら諦められる想いが、数メートルの距離に近づいても満たされない……」

濡『(淋しそうに)まるで太陽とお月様みたいだね』

秀一(M)「別れの濡の言葉を聞きながら僕は思った。こんなに辛い思いをするのなら、気がつかなければ良かった……」

○2006年 新宿。

雑踏の中、酔客の声。

秀一(M)「その後、僕達は再び電話でだけの遣り取りを続けながら、互いの人生を歩んでいる。濡は高校卒業後、市内の福祉学校に進み、介護士の資格を取ると、夕張の老人福祉センターに勤め始めた。僕は高校時代からアルバイトをしていた今の会社でシステム・エンジニアとして働いている」

携帯の音。

秀一「はい」

濡『「あ、いま大丈夫？」』

秀一「うん」

濡『「会社？」』

秀一「いま出たところ」

濡『「相変わらず遅いね。もう十二時近いよ。夕食食べた？」』

秀一「これから」

濡『「またコンビニ弁当？」』

秀一「多分」

濡『「そんなんばかりじゃ、身体壊すよ」

秀一「一人暮らしの気軽さだね。気をつけるよ。ところで大変そうだね？」

濡『「え？」』

秀一「夕張……。ニュースで……」

濡『「(思い出したかのよう) あ！ああ！急な話だったから」

秀一「……他に何かあった？」

濡『「どうして？」』

秀一「なんとなく。ちょっといつもと違うかなって。そんな気がした」

濡『「……やっぱ、分かっちゃうね」』

秀一「話せる事？」

濡『「聞いてくれる？」』

秀一「聞くことしか出来ないけど」

濡『「……私の担当していたお爺ちゃんが、今朝、病院で亡くなったの。ガンだった。何度かお見舞いにも行って、その度に喜んでくれた。お爺ちゃんの家族、みんな本州でね。私を孫みたいに可愛がってくれて。お爺ちゃん、北炭の炭鉱マンだった。うちの亡くなったお爺ちゃんは夕張だったでしょ。だから余計にね……」

秀一「……大丈夫？」

濡『「……多分、(涙声で)……大丈夫じゃない」』

秀一(M)「濡の声を聞きながら、この瞬間、傍にいてやれない痛みが雪の様に僕の心に降り積もり、チリチリと焦がすのを感じた」

滯 『ゴメン。また泣いた。泣いて電話するの止めようと思うんだけど……』

秀一 「俺でいいなら、いつでも電話して」

滯 『ありがとう。でもダメだよ。いつまでも甘えられないよ。秀君に彼女さんとか出来たら悪いし、それに結婚なんかしたら……』

秀一 「……滯」

滯 『ゴメン！変な事、言ったね。お休み！』
電話の切れる音。そこに霧雨の降る音がぶる。

秀一 (M) 「そう言って切れた電話を握り締めながら、僕は梅雨に濡れる星の見えない東京の夜空を見上げた……」
遠雷の音が聞こえる。

○夕張・滯の福祉センター

談話室で会話する老人達の声。

TVから流れる夕張財政破綻の報道。

老人A 「この先、どうなるんかね」

老人B 「何でも高くなつて、住みづらくなるな」

老人A 「閉めた店もあるつてよ」

老人B 「そのうち、このセンターも」

二人に近づいてくる足音。

滯 「どうしたの？心配そうな顔して……」
老人A 「滯ちゃんかい。いや、俺達の居場所がなくなるかと思うとよ」

滯 「(笑いなながら) そんな事、あるわけないじゃないですか！」

老人A 「……それならいいんだけどな」
滯 「大丈夫ですって！」

老人B 「……滯ちゃんは、街、離れねえのかい？」

滯 「どうしてですか？」

老人A 「若い人たちには住みにくくなったからよ」

滯 「それはみんな一緒ですよ」

老人B 「でも札幌とかの方が、何かと便利だしね」

滯 「でも、住みやすいのとは別ですよ。(おどけて) それに私、バリバリの夕張っ子ですから！頼まれても出て行かないですよ！」

老人A 「(笑いなながら) そりゃ心強いや！」
滯 「(囁くように) 安心してください。私はいつでも傍にいますからね」

○秀一の会社。

日常の音が聞こえる。

そこに携帯の「You Got a M

ale」の音。

秀一 「……八嶋か。また急な話だな……」

○都内・居酒屋。

ざわつく周囲の音。威勢の良い店員の声

と酔客の声。

秀一 「おまたせ！」

八嶋・西尾 「お疲れ！先やってるぜ」

秀一 「ああ。(栓を抜く音) へえー、瓶ビー

ルか。(グラスに注ぐ音) じゃ、とりあえず……」

三人 「はい。御無沙汰！」
グラスを合わせる音。

八嶋 「だけど、秀一と会うのも久しぶりだな」
秀一 「西尾が去年、一度帰って来たとき以来だから、丸一年ぶりくらいかな？」

西尾 「へー。二人でよく会ってるのかと思つたよ」

八嶋 「俺は大学生で暇なんだけど、秀一が忙しくてさ。なんだってチーフ・エンジニア様だから。今日みたく強引にいけないと時間取れないわけよ」

西尾 「高校の時から忙しそうだったもんな。(突然、思い出し) ……そう、高校といえ、あのロボット・コンテスト！八嶋が操縦さえ失敗しなけりや……」

秀一 「また、その話かよ。……悪酔いしそうだ」

八嶋 「へいへい。どうせ俺の操縦がヘタツピでしたよ」

秀一 「別に誰のせえつてわけじゃないさ」
西尾 「でも秀一が組んだロボット・アームのプログラムは凄かったよな。だからコンテストを見に来た会社の人だって、お前が進学を諦めた時、すぐ声かけてくれたじゃないか？」

秀一 「ああ。感謝してる。でも俺ぐらいのはザラにいるよ……」

八嶋 「少しは威張れよ。……相変わらず

不器用なのな」

西尾「そこが秀一のいいところだよ。で、俺が今回、帰って来たのは……」

八嶋「卒業が近いんで、就活の為だろ？」

西尾「違つよ。俺、大学の研究室に残るんだ」

秀一「良かったじゃないか！あの工科大、アメリカでもレベル高い方だろ？」

西尾「まあな。で、教授にあのロボットのビデオを見せたら気に入ってさ。特にアームの動きが。プログラム組んだ人間、褒められたよ」

秀一「今じゃマニアな中学生でも簡単だろ？」

西尾「六年前だぜ？あの頃は大学生でも無理！」

八嶋「確かにな……」

秀一「そうかな？」

西尾「そうなんだよ！で、うちの研究室、例の国際宇宙ステーションに絡んで、それもロボット・アーム」

八嶋「西尾、それって……」

西尾「秀一、お前が希望すれば、奨学金付きの研究生として迎えてもいいって、教授が言ってるんだ。な、夢だったろ？ロボット開発！」

秀一（M）「旧友の思わぬ言葉に、忘れたはずの夢を思い出した僕の気持ちは、激しく揺らいだ……」

○秀一の会社・夜

キーボードを叩く音だけが聞こえる。

携帯の着信音。

秀一「もしもし」

濡「今晚は。大丈夫？」

秀一「うん」

濡「外？」

秀一「会社」

濡「残業？」

秀一「そんなとこ」

濡「ゴメン、かけ直す」

秀一「いい。ちようど一息入れるとこ。どうかした？」

濡「この前、変な事言つたから……」

（照れ笑いながら）なんか、今更って感じだよね」

秀一「気にし過ぎ。辛い時は頼って」

濡「だめだよ。優しくされたら、私、わがままになるから……無理言うから……」

秀一「どんな？」

濡「……この前ね。センターのお爺ちゃん方に約束したの。いつも傍にいるって。で、その時に思った。私は誰にいて欲しいんだろ？って」

秀一「……濡、」

濡「ね。無理な事言うでしょ。小学生の頃と変わらないよね。成長しないっていうか……」

秀一「濡……あのね。俺……」

濡「（慌てて）ゴメン！忘れて！お休み！」

電話の切れる音。

霧雨の音に混ざって、遠くに街の雑踏が

微かに聞こえる。

秀一（M）「僕達はいつも互いの事を気遣いながら傷ついていった。どちらかがもう少しわがままなら、僕達はもっと近づけたはずなのに……」

エリック・クラプトンの曲、ワンダフル・トゥナイトの間

○新宿・中華店

中華鍋を威勢よく振る音と食材が焼かれる美味そうな音。

そこにドアの開く音。

同僚「課長！丸つとひと月！俺も秀一も会社出るの深夜零時ですよ！なあ！秀一！」

秀一「いや、まあ……」

課長「わーつたつて！だから今日は日頃の労をねぎらってやるって言うてんじやねえか！」

店主「いらつしやいませ！」

上司「どうも。とりあえず焼き餃子三人前と生！三つ！」

店主「（威勢良く）はい！」

椅子を引く音。TVの野球中継の音が聞こえる。

上司「ん？ノリの悪い顔してるな？」

同僚「……暑気払いで中華つかか？普通はビア・ガーデンとか……」

上司「バカだね。この梅雨時に、なんで外で飲まなきゃなんないんだよ？なあ、秀一」

秀一「そうですね……」

上司「・・・どうかしたか？」

秀一(M)「あの後、たびたび西尾からアメリカ行きを誘われていた僕は、濤は勿論、会社の上司にも相談できずに悩んでいた」

上司「悩み事か？」

秀一「(決心して)あの・・・」

突然、店内にバード・コールの音が響く。

秀一「・・・あ」

女の子の笑い声と鳴り続けるバード・コール。

上司「へえー、お嬢ちゃん、バード・コールとは洒落た物、持ってるね」

主人「(笑いながら)たまたまキャンプ道具を買いに行ったら、ねだられて買ったんですよ。そしたら何が面白いのか、御覧の通り、四六時中ですよ」

上司「音が気にいったんだろ？」

主人「多分ね。おかげで、この娘がどこに居るか直ぐに分かりますよ」

中華店の音が消えていき、虫の鳴き声や鼻の音が聞こえてくる。

濤(M)「秀君。何処に居ても分かるよ」

虫と鼻の鳴き声が消え、中華店の喧騒が戻る。

秀一「そうだね。何処に居ても・・・」

○秀一の会社・会議室

キーボードを叩く音や電話などの日常音。

上司「秀一、この前の件な。やっぱ気持ちちは変わらんか？」

秀一「・・・すいません、課長」

上司「お前に抜けられるのは辛いんだよな・・・」

秀一「基本プログラムは組んでありますので、後は応用でいけると思いますが」

上司「いや。俺が言ってるのはね。手持ちの仕事の話じゃないわけよ。今後の当社の展望としての話」

秀一「・・・すいません。お世話になっておきながら」

上司「本当は意地でも止めるべき何だろうけどな・・・」

秀一「そう言っていたら嬉しいですよ。でも・・・」

上司「仕方ねえよな。想いが走っちゃったら、もう止められねえよな」

秀一「・・・すいません」

会議室を出て行く秀一。

入れ替わりに同僚が会議室に入ってくる。

同僚「秀一、二番に電話。長野の長縄さん。プログラムにバグ出たって」

秀一「システム障害かな？ありがとうございます」

ドアの閉まる音。

同僚「(コソコソと)課長、本当なんすか？」

上司「(ぶつきらぼうに)何が？」

同僚「秀一が会社辞めるって話ですよ！」

上司「・・・いらねえ時に早い情報処理能力だな」

同僚「やっぱ本当なんすか！大手に行くんすかね？アメリカに行くって噂もありますよ？」

上司「ん？辞令が正式に出たら教えてやるよ。まあ何にせよ。俺としちや、出来るだけ力になってやりたいと思うね」

○夕張・濤の福祉センター。夕方
仕事が終わわり、駐車場に向かう濤と同僚達。

互いに「お疲れさま」とねぎらいの声。

同僚「濤ちゃん、あんたどうするの？」

濤「今日は車だから飲めませんよ」

同僚「違うよ。仕事の話」

濤「へ？」

同僚「だから！事務長も言ってたしよや。これからは市からの助成金も厳しくなるって・・・給料にも影響出るよ」

濤「その話ですか・・・」

同僚「何人かは、別のケア・センターに履歴書出してらって。札幌に行くって娘もいるよ。さすがにあたしの歳じゃね。でもあんたは若いんだから何処でも雇ってくれるよ」

濤「そんな事、ないですよ」

同僚「それに、いまなら行けるんじゃないかい？」

濤「何処にですか？」

同僚「例の電話の。東京の彼氏の所」

濤「(照れながら)か、彼氏じゃないですよ！幼馴染ですよ！」

同僚「なににせよ・・・」

車のドアの開閉音、エンジンのかかる音。

同僚「・・・一度、良く考えた方がいいよ。」

後悔先に立たず。素直におなりよ」

となりにいるよ」

走り去る同僚の車の音。

それを見送りながら、一人で呟く漣。

漣 「……そう言われても。うん。秀君に会いたい。でも会ったら、離れられなくなる。私、夕張の大切な想いを置いていけないのかな？そんな私を秀君はどう思うのかな……」

その時、突然、漣の携帯が鳴る。

漣 「秀君？」

秀一 『うん』

漣 「(少し緊張して) どうしたの？昔から電話は私からってろ……」

秀一 『ゴメン、いま大丈夫？』

漣 「……何かあった？」

秀一 『漣の声が聞きたかった』

漣 「(動揺して) 突然なに？なんか変だよ？」

秀一 『そお？』

漣 「……秀君？」

秀一 『いまバード・コール持ってる？』

漣 「……うん」

漣のバード・コールの鳴る音。

秀一 『その音で漣が何処にいても直ぐ分かるよ』

漣 「(途惑いながら) ……ヤダ。どうしたの？いま会社？」

秀一 「いや、……東京にはもういない」

漣 「うそ！どういう事？何処にいるの！」

漣に近づいてくる靴音。

秀一 「(電話の声ではなく) ……ほら、

(了)